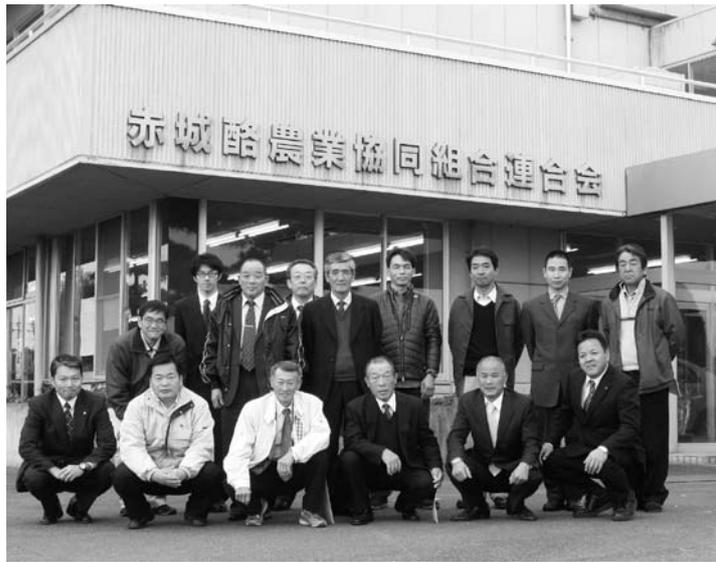


「コンビラップ」に「夢」膨らむ！ 赤城酪連TMRセンターを視察



として、広酪のTMRセンターの在り方と方向を定めて往く為の参考とするため、赤城酪農業協同組合連合会(二十二年度期末資料・販売乳量約三万四千ト、百二十七戸)が運営する飼料中継基地内のTMRセンターと、その製品を利用する酪農家視察を行った。

広酪からは山本武組合長を始め、岩竹重城理事、藤井鉄男理事、

広酪は、第六次中期三カ年計画に、みわ・庄原TMRセンターの統合による効率的な運営を掲げ、生産委員会(岩竹重城委員長)を中心に協議を進めている。

温泉川寛明理事、大上浩也理事、川角晴俊理事の生産委員五名と、西中晃参事、中山篤志課長、大島達夫係長、竹ノ内寛治主任の事務局四名が同行した。

このほど、生産委員会を中心



■裁断型ロールベラーによるコンビラップ方式を導入

TMRセンターは、赤城酪連の飼料供給基地に併設され、日量約二十八トのTMRを製造。同センターでは、二年前程前は広酪同様に「トランスバツク方式」による発酵と供給を行っていたが、これら施設の多くを活かして、より良い発酵品質と製品の安定を求め、裁断型ロールベラーによるコンビラップ方式に変更した特徴を持つ。

■コンビラップ変更により利用者は満足

利用酪農家の多くは、『コンビラップ方式』での発酵TMR飼料の品質は従来品(トランスバツク供給)に比較して大変優れており、カビ発生も無く、発酵状態に満足と高い評価を得ている

日々徒然 かがやき



ある昼下がり、広酪本所に男女二人の来訪者があった。
ご要件は、「牛乳ポスターコンクールで入賞したポスターの写真撮らせてもらっても良いですか・・・」との打診。

話を伺いすると、このたびの第十八回広島県牛乳ポスターコンクールに入賞された児童の母さんとそのご兄弟であった。

県内の遠路からおいで下さったとあって、昼休憩でもあり、職員数名で本所会議室に撮影資材を持ち込んで、ポスターに受賞名と氏名ラベルを貼り付け、急遽スタジオを設営した。

その間、お母さんからは、涙ながらに感謝の言葉が告げられた。

来訪理由は、ポスターコンクールに入賞されたお子さんの父親が重い難病にかかり、余命が告げられた。一刻も早く、息子さんが一生懸命に描いたポスターを父親に見せて励ましたいとの強い思いの一心での行動で、奥さんと兄弟方が受賞ポスターの写真撮影し持ち帰りたいとあった。

▼対応した職員らは、「病床にあり、育ち盛りの子供さんと一緒に遊んであげられない」父親の辛さや、ご家族の胸中が脳裏をかす



との説明を受けた。

高い評価を得る理由としては、高い圧縮密度から空気の追出し改善が図られ、発酵状態が大幅に改善した効果であると分析されている。

また、当初想定していなかったが、不幸にも運送中や牧場庭先での保管堆積中に事故や動物等によつて穴が開いた場合でも、よほど大きな穴でも無い限り、そこからダメージが拡がることが無いという利点もみつかったと飼料製造担当者は語った。

■コンビラップ変更は スムーズに出来た！

多くの利用者は当初、従来のトランスバック方式による供給体系に慣れがあり、自給飼料のロールベールの利用経験がない牧場も多くあった。

このため直径約一メートルもあり、およそ五百キログラムにも達するコンビラップ製品の扱いを不安視する声も随分上がった。

実際に供給を開始してみると、輸送用バンドを巻いた「裁断TMRロール」はその扱いが従来のトランスバックと何ら変わらないことから、むしろ傾けて外袋の上から中身を掻き出したり、底から内袋ごと抜き出す等の手間を省けなくても、外側からネットと共にラップを切り裂くだけで簡単に中身を取り出せ、むしろ簡単で好評であると聞いた。

なお、同TMRセンターでは、既存の施設をうまく活かしてコンビラップ体系に移行しているため、どうしてもロールベールによる体系が牛舎設備や状況によって出来ない場合に備えて、従来どおりのトランスバックによる発酵・供給体制が確保されていた。

■自給飼料増産と 簡単な給与作業

コインサイレージのラッピング作業の請負や搾乳牛・乾乳牛用の「乾いたTMR」を裁断型ロールベローを介

してコンビラップ方式でラップし、供給する斬新な取り組みもなされ、県外への出荷も行われている。

これまで、一部の類似製品において、硬くて崩れにくく、給与が非常に困難であるとの話も聞かれ心配していたが、実際に訪問した利用酪農家の庭先で、手作業での開封給与作業を見学したところ、驚くほど簡単に給与されていることを確認し、かつ、その品質の素晴らしさに委員一同は納得であった。

今回の視察では、その簡便な構造や安定した品質、円滑かつスピーディな作業行程、庭先での実際の給与等、今後のみわ・庄原両TMRセンターの統合・方向性を検討する上で大変参考となった。

今後、施設統合やコンビラップ方式での供給体制等、生産委員会をはじめ、飼料利用推進委員会でも意見を聞きながら慎重に検討を進めて行くこととしている。



(稼働しているコンビラップ)

め、胸の詰まる思いの中で対応した。

▼この度の出会いを機会とし、広酪や普及協会の牛乳・乳製品の普及活動を紹介したところ、受賞されたお子さんは「牛乳が大好き」で応募された理由を知ることが出来た。お子さん(小学校二年生)の夏時点の身長は百三十五cm。今後、すくすく元気で明るく成長されることをご家族とともに応援したい。

▼今回は牛乳ポスターコンクールへの応募と入賞がキッカケとなる出会いでもあり、家族の確かな絆を感じる事が出来た。

▼先日、日本にはブータン国王が来日。ブータンは「国民総幸福量(GNH)」というユニークな指標に沿って政策を行う国として知られており、日本政府は、国内総生産(GDP)で測れない、経済社会状況、心身の健康、家族や地域社会等の豊かさを表す新たな「幸福度指標」の検討を始めた。

▼自分が幸せだと感じる尺度は、それぞれに差がある。皆さん、いま幸せですか。あらためて考えさせられる出来事であった。

▼入賞されたお子さんの喜ぶ姿とそのお父さんの微笑ましい笑顔を思い浮かべ、お父さんの快気とそのご家族の幸せを切に願いたい。





(解りやすく講演する渡邊先生)

儲かる酪農経営の秘訣 「牛を健康に管理すること・ 死廃事故防止」 渡邊先生の経営哲学に耳を傾ける!! 県内一円から五十名を超える参加

一年間に乳牛の死廃が無かった方は拳手を

先生は講演会の冒頭「皆さんの牛舎で今年一年間に乳牛の死廃が無かった方は拳手されたい」と問うた。一人も手が拳がらなかった。

酪農経営で儲ける秘訣

酪農経営で儲ける秘訣は、「牛を健康に飼う」、「乳量を上げる」、「コストを下げる」、この為には、飼養管理を徹底し、周産期疾病防止に努めることを最優先すべきであると説いた。

また、餌給与に関しては、飼料給与の順番は重要で、胃腸の消化スピードを考えた給餌態勢をとることでルーメン内の環境を整えることが一番。飼料給与で残滓があるとすれば、それは現金を捨てるに等しい。一方、牛が太っていることは無駄飯を与えていること。つまり、余分な経費・コストがかかっている。といった点に触れて、「儲かる酪農経営」のポイントを力説された。

太った牛は、低カル疾病等の周産期疾病を招き事故発生を伴う。従って、

広酪は、平成二十三年度に第六次中期三か年計画を策定しスローガンに「夢の実現3S」を掲げた。三次市酪農振興会(会長 橋本洋資)は渡邊徹副局長(徳島県東部農林水産局〈吉野川〉)を先生に迎え「儲かる酪農経営」に纏わる講演会を開催。翌二十三日は、橋本会長経営の牧場にてバーンミーティングを開催。広酪は、掲げるスローガンの一貫としてこの開催を支援した。講演会には、県内一円から酪農後継者や酪農業に従事する夫婦など五十名を超える参加があり、終了後に実施したアンケート結果では「具体事例もあり、非常に良く理解できた」、「先生が紹介された強肝剤やカルシウム剤の取り扱いを検討してもらいたい」、「これまでの飼い方の意識を改めるのにとっても参考になった」と感想が寄せられた。

講演会終了後、参加者が先生のもとに集まり熱心に個別の相談をされている姿があった。



(熱心に勉強する参加者達)

その産次に期待する生乳生産量に結びつかないと指摘された。

周産期疾病防止対策

周産期疾病を起こさない対策で、カルシウム給与は重要と説くとともに時代にあった牛の飼養管理は大切で、三十年前の乳牛の年間産乳量は六千kgで、当時のままの管理は論外。

現在の乳牛は家畜改良も進み普通に

年間一万kgを超える能力を持ち合わせており、これに併せた管理が重要である。

講演のポイントの端々に理路整然とした説得力ある説明で、参加者が「なるほど」と共感されている様子が伺えた。

先生は最後に、「良いことは直ぐに実践を」と呼びかけられ、参加者の中には、帰路に際して早速、広酪のリンカルペレットを買い求められた方もあった。

徳島での事例

牛群検定成績表以外に自分で成績をまとめると、データが頭に入りやすい。グループ平均乳量、空胎日数、体細胞いずれも成績向上した。所得率二十%から三十一%に改善。昨年四十%を超えた。牛の健康を第一にすると儲けはついてくる。

意識の改革

因果関係を把握し、問題となる原因を全部つぶせば問題は解決する。正しい理論に牛に合った理論を勉強

先生は、実際に牛を見ながら分かり易く説明され、参加者は非常に熱心に先生の説明を受け、質問が絶えなかった。腰角の温度でカルシウムの充足程



(橋本牧場でのバーンミーティングの様子)

すること。牛が先生であり、牛の観察・理論・確認が重要である。牛は常に進化しており、過去の理論が正しいとは限らない。新しい技術が次々と開発されているので、常識にとらわれず、目の前の事象を理論的に考える癖をつけることが大切である。

バーンミーティング

度が確認できる点に参加者の関心が寄せられ、「牛を観察し牛に聞くこと」の重要性を改めて実感できた。先生は「自分の話が少しは刺激になったようで、幸いに思う。また、参加されていた酪農家の方の熱心さに感じ、何よりマンネリ化した経営を見直すきっかけになったようで今回の研修会の皆さんの反応がとてうれしく思う」とコメント。

まとめ

今回の講演会を通して、参加者のしっかりと酪農経営を築いて行くための意気込み、熱意を感じることが出来た。

広酪のやるべきこととして、組合員の経営指導相談にしっかりと応じる態勢の構築、更に、足りないところは、外部から専門家を招くなどにより堅実な酪農経営の実践に対する強力なサポートへの期待を感じた。

改めて、生乳生産基盤維持の根底を考える中で決してこの点は外してはならないと、講演会を通じて再認識した。